

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第46集)

# 白川金色院跡発掘調査概報

—平成11年度—

2000

宇治市教育委員会

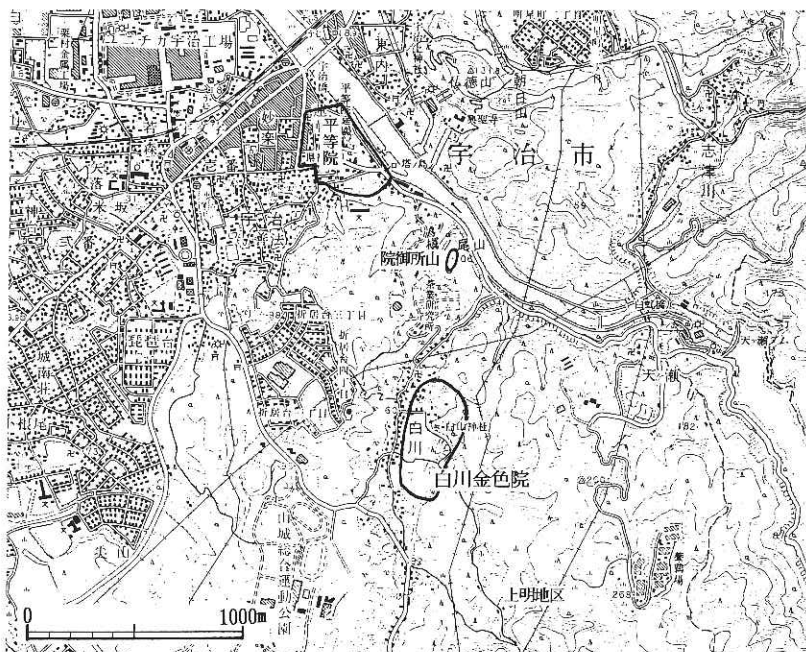
## 例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が平成11年度に国庫補助事業として実施した、白川金色院跡発掘調査の概要を取りまとめたものである。
2. 本発掘調査の経費は総額8,000,000円であり、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその50%を、京都府から文化財緊急保存補助金として25%の補助をえた。
3. 本発掘調査は平成11年10月20日に開始し平成12年3月17日に終了した。発掘面積は450㎡である。
4. 本発掘調査は下記の体制で実施した。

発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷口道夫  
調査専門委員会：〔委員長〕 狩野 久（京都橘女子大学）  
〔副委員長〕 中川恵次（宇治市文化財保護委員長）  
〔委員〕 上原真人（京都大学）・仲 隆裕（京都芸術短期大学）、  
西山良平（京都大学）・山岸常人（京都大学）

発掘調査担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係 主 事 浜中邦弘  
発掘調査事務局：宇治市歴史資料館  
発掘調査補助員：中井淳史・小谷紗代・岡本智子・畑 陽子・西田倫子・志村みどり・久保千恵子・新井朋哉・  
足立千春・山下 睦
5. 実施にあたっては下記の方々よりご協力・ご指導賜った。感謝したい。（順不同・敬称略）

ご指導：文化庁記念物課、京都府教育委員会文化財保護課、坂井秀弥（文化庁記念物課）、  
増淵 徹（京都橘女子大学）、山口 博（京都府教育委員会文化財保護課）  
ご協力：白川区、服部製作所、桂久男、福本哲了、辻喜代一、北村晶子、山中登、古川悦子、  
村田源造、服部善一、服部正吉、小島喜三、古川治、上村巖、中村重和
6. 本発掘調査の関係資料及び出土品は宇治市歴史資料館が保管している。
7. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を浜中邦弘と杉本宏が担当した。  
執筆は杉本宏（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ）と中井淳史（Ⅲ）が担当した。



◀白川金色院の位置

## 序

白川金色院跡は、平等院の山一つ南の美しい白川の谷里に残る遺跡で、平安時代後期にあたる康和4年(1102)に、関白太政大臣藤原頼通の娘であり、後冷泉皇后であった藤原寛子が創立したと伝える寺跡です。記録によれば、その本堂は文殊菩薩を安置した金色に輝く大きな仏殿であったといい、その他にも多くの坊舎が建立されていました。

現在、白川区には、この白川金色院に関係する重要文化財指定の仏像あるいは鎮守社である白山神社、また惣門などが残され、往時のいくばくかを偲ぶことができます。しかし平安王朝期に花開いた栄華の実像は、永い時の経つ中で白川の自然の中に埋もれ、この谷里の風景として息づくこととなりました。

白川金色院跡の往時の姿を解明しようと、私ども教育委員会が文化庁・京都府教育委員会そして地元白川区の皆様のご協力の中で発掘調査を開始したのは平成5年度のことでした。以来、今年度で7年目を迎えます。今までの発掘調査では、平安期の仏堂跡の発見や貴族の生活を彷彿とさせる豪華な経塚出土品、あるいは絵巻から飛び出てきたような室町時代の坊院跡の発掘などから、この遺跡の歴史的な重要性あるいは文化財的価値の高さをうかがうことができました。そして今年度の発掘調査では、本書にその概要を記すとおり、長祿4年(1460)の焼失とその後の再興の過程を考古学的に証明し、さらに寺城南限の目安をつけることができました。

白川金色院跡は、世界遺産であり国宝の平等院や宇治上神社と同じく、平安時代の宇治に花開いた王朝文化を代表する重要な遺跡です。教育委員会としましては、今までの発掘成果を踏まえ、更に実態解明の発掘を継続しつつ、この遺跡の保存と活用について検討を進めてゆきたいと考えています。

末筆になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご指導いただいた関係機関・各位、またご協力いただいた地元白川区の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成12年3月

宇治市教育委員会  
教育長 谷口道夫

## I. 遺 跡 の 環 境

(沿革) 白川金色院跡は、宇治市白川字宮ノ前・宮ノ後・娑婆山他に所在する古代末期から近世にかけて存続した寺院跡である。遺跡名は地元の地藏院に伝わる建武2年(1335)銘梵鐘に「金色院」と刻され、地藏院文書寛正4年(1463)「金色院御堂再興勸進状」に「白川別所金色院」とあることなどから、「金色院」の頭に土地名を冠しての名称が用いられている。

寺の沿革は「勸進状」によれば、康和4年(1102)に太皇太后藤原寛子が七間四面の文殊堂を建立したことに始まるという。寛子は藤原頼通の娘であり後冷泉皇后であった。この文殊堂には金がちりばめられ「金色殿堂」と呼ばれたという。以降、堂舎の造営は続けられたが、応仁の乱直前の長祿4年(1460)に火災に遭い、寛正四年の再興勸進となる。再興は順調に成ったようで、近世初頭の記録に多くの坊院名が登場する。しかし江戸前期には退転し、18世紀後半では惣門・文殊堂・鐘楼そして坊院3院と鎮守白山神社のみとなり、明治初期の廃仏毀釈によって残った最後の坊院が廃絶した。

現在は、建造物として惣門と鎌倉期の拝殿(重要文化財)を伝える白山神社が残り、梵鐘は地藏院に移っている。また同院には重要文化財を含む仏像や経典類も伝えられている。

(遺跡) 白川地区は、平等院の南東1キロに所在する谷里である。この白川谷は、長さ南北約1キロ、谷幅東西200~400m、谷底の標高は50m程、周囲の山丘は標高100m程である。谷川である白川は谷の西寄りを北流し、現在は暗渠化し谷を通る主要道路となっている。集落はこの道路沿いに現在60余戸が展開している。

谷の東縁辺部中央は緩斜面が発達し台地状となる。土地利用は概ね水田や畑などの耕地であり、寺跡はこの部分に展開することとなる。現存する惣門から白山神社へと続く参道沿いには、近世まで存在した坊院名を伝える土地区画や文殊堂伝承地が存在し、白山神社前の窪地は弁天池の跡であることが記録から知られる。寺跡の中心域は、この参道が通る比較的平坦地が広がる場所であることは状況的に予測してよいであろう。

参道辺りから北側あるいは南側には、緩斜面に棚田や茶畑が展開するが、これらを地形に注意して観察すると、斜面の耕地としては規模が大きい平坦地や耕地造成以前の人為造成地形と判断可能なものが多数認められる。今までの発掘結果としては、これらの平坦地などは、いずれも白川金色院に関係する堂跡あるいは坊院跡の可能性が極めて高いものであり、このような地形の展開する範囲は、南北約500m、東西約200mに及ぶ。

丘陵部にも関係遺構が現存し、あるいは推測可能である場所が認められる。白山神社の背後丘陵には経塚、丘陵の北斜面の谷川近くには平坦地造成された閼伽井跡、またその付近には丘陵斜面を削り出した多くの祠跡、さらに周辺丘陵部にも類似地形と伴に「キノボウ」などの地名が伝えられている。白川谷北端の宇治川との接点部左岸に槇ノ尾山があるが、この丘陵は別名「インノゴシヨヤマ」と呼ばれ頂部に土塁が巡る。これも金色院関係遺構の可能性が高い。



## II. 位置と環境

(発掘調査事業の目的) 白川金色院跡の計画的発掘調査の開始は平成5年度であり、今年度で7年目になる。この発掘調査事業の目的は、白川金色院跡の遺跡内容・保存状態・範囲等の埋蔵文化財保護にかかる基礎的資料を得ることにある。白川金色院は、藤原道長建立の浄妙寺(市立小学校内に保存)、藤原頼通建立の平等院(史跡・名勝)と伴に宇治に残る藤原摂関家関係遺跡の代表的寺院であり、地域史的価値にとどまらず日本史的・文化財的な重要性が予測されながら実態が全く不明となっていた遺跡である。

白川地区は開発行為に一定の法的制約があり、市街地近郊にもかかわらず豊かな自然、伝統的風土あるいは歴史的景観が良く保たれている。この段階において白川金色院跡の具体的資料を収集し、早期に保護にかかる対策を立案し実行ができれば、文化財保護対策として極めて効果的・効率的であることは間違いなく、今日的状況からすれば本市の文化財保護行政上、本事業の優先度は高いと言わねばならない。

(過去の発掘調査) 計画的発掘調査の初年度である平成5年度は、明治初年まで存続していた福泉坊跡を発掘した。この調査では、近世福泉坊遺構の下層に中世期庭園遺構が存在し、さらにその下層に平安期遺物を含む火災層が存在することを確認した。

平成6年度は、白山神社南方の礎石反応が確認できる棚田で発掘調査を行った。この結果、主殿造の主屋と付属屋また園池などを発見し、中世期坊院の状況をうかがうことができた。

平成7年度は、福泉坊跡の東隣接地で文殊堂伝承のある畑地で発掘調査を実施し、平安期に所属が想定できる仏堂を検出した。

平成8年度は、昨年度発見の仏堂の規模確認の発掘調査を行い、建物は一間四面を基本とし全面に孫庇をもつこと、12世紀初頭の鎮壇具を埋納することが確認できた。創建期に所属する初めての遺構確認である。

平成9年度は、関伽井跡の調査と白山神社背後丘陵で経塚の調査を行った。関伽井は湧出部に

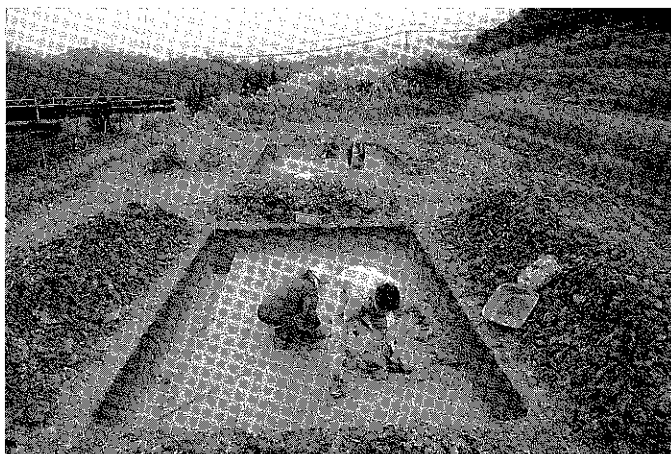


fig. 2 発掘調査風景(8・7トレンチ)

石組を配置し水路と池とで構成されていた。経塚は踏査時に経筒破片を採取し、確認調査を行ったもので、12世紀後半期の埋納品を発見した。

平成10年度は平成6年度調査地の東隣で発掘を行い、焼失痕跡を認める12世紀後半期の礎石建物を発見した。

以上のような計画的な調査以外にも、昭和55年度に白山神社前の園池跡(弁天池跡)の発掘を実施している。

### Ⅲ. 発掘調査の概要

#### A. 今年度の発掘調査経過

今年度の発掘調査は、初年度である平成5年度から数えて7年目の発掘調査であり、全体計画の中では第2期5年計画の2年目にあたる。

また今年度から、学識者6名で構成される白川金色院跡調査専門委員会を組織し、12月3日に委員会を開催した。この中で、寺の広がりについては谷部分のみならず、丘陵部における遺構確認が特に必要であること等、専門的な指導を受けた。

発掘調査はこれらの指導を踏まえながら、寺跡中心域での遺構の残存状況の確認、丘陵部における遺構の存否確認、寺城南限の確認、および白川地区から丘陵を南に越えた上明地区<sup>じょうみょう</sup>での坊院伝承地の状況確認を目的として実施した。

準備作業を含め発掘調査の開始は平成11年10月8日であり、平成12年3月17日に現地調査を終了した。この間の平成12年3月11日に現地説明会を開催し、折りからの小雨の中でも60名を超える市民の方々の参加をえた。また3月16日には文化庁文化財調査官の現地視察を受け、今後の進め方について意見交換を行った。なお発掘調査面積は合計約450平方メートルである。

#### B. 発掘調査状況

発掘調査は所期の目的に沿って、大きく調査区を五つに分け、それぞれに複数のトレンチを設定した。以下にその概要を報告する。

(調査区1) 調査区1は今回の発掘予定地の中で最も南に位置し、東側丘陵から延びる小さな谷状地形である。この谷状地形から南側には、坊院跡などを予測させる明確な造成地形が観察されないため、寺城南限の確認作業として1～3トレンチを設定した。

1トレンチは谷中央に細長く設定したもので、特に遺構は検出されず、遺物も特に出土していない。土層は、耕作土下に耕作面造成の盛土層があり、地表下70cmの所に拳大の小石を含む自然の堆積層が認められた。湧水がある。

2・3トレンチはその南側と西側でグリッド状に設定した。特に遺構は検出されず、遺物も出土していない。この両トレンチの層序は基本的に類似しており、耕作土下に耕作面造成の盛土層があり地表下150cm辺りで炭層を確認した。ただしこの炭層は現代のものであり、現耕作面造成以前の地表であると考えられる。下層は暗灰色粘質土や砂質土の地山層である。湧水がある。

(調査区2) 調査区2は、白山神社の南にある独立丘陵であり「別山」と呼ばれている場所である。別山は白川地区の自然景観の中で存在感が強い。トレンチは丘陵頂部と裾部に4～6トレンチを設定し、遺構の存否確認を行った。

4トレンチは丘陵頂に設定したトレンチで、頂部の南トレンチと北斜面にかかる北トレンチとに分かれる。両トレンチとも落葉や腐植土を除去すると直ちに岩石質の地山があらわれ、特に遺構・遺物は認められなかった。





fig. 3 調査区3・1の風景  
(NE→SW)

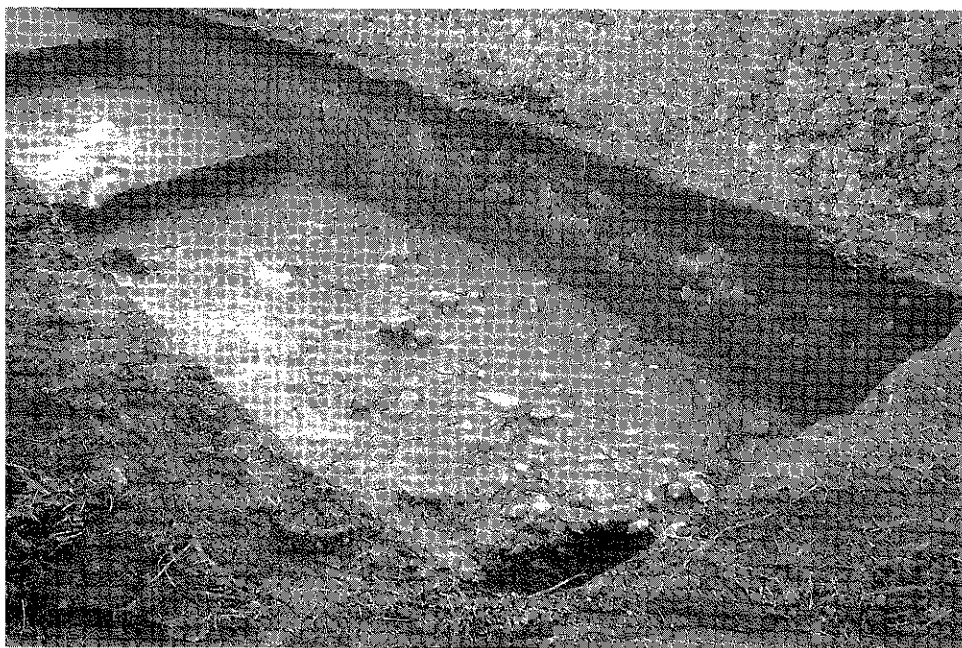


fig. 4 1トレンチの自然堆積状況  
(NE→SW)

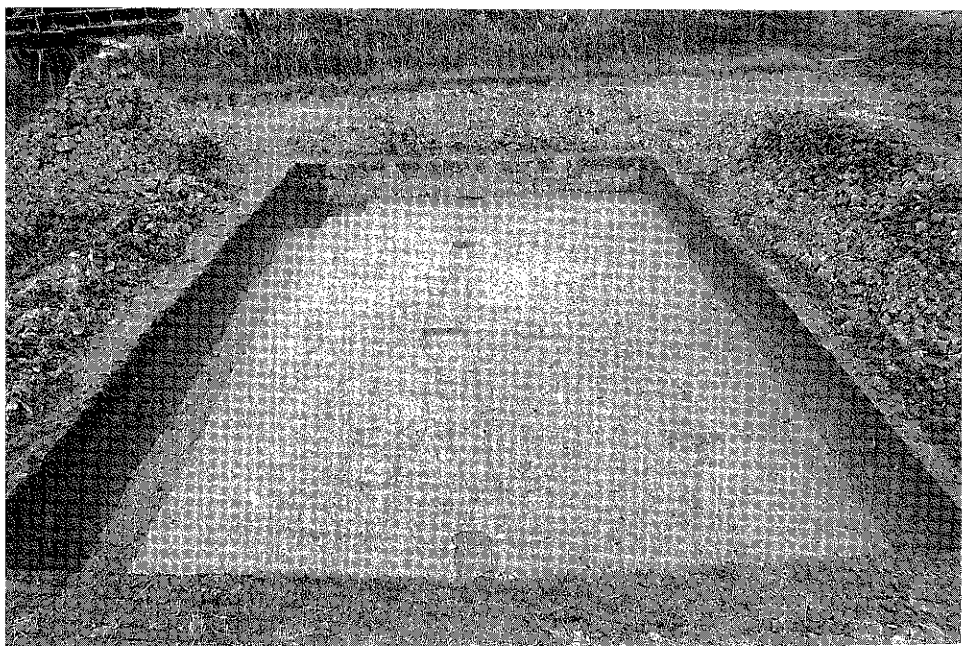


fig. 5 7トレンチの状況 (S→N)



fig. 6 辻之坊跡から調査区5を通して調査区2(別山)を望む  
(NW→SE)

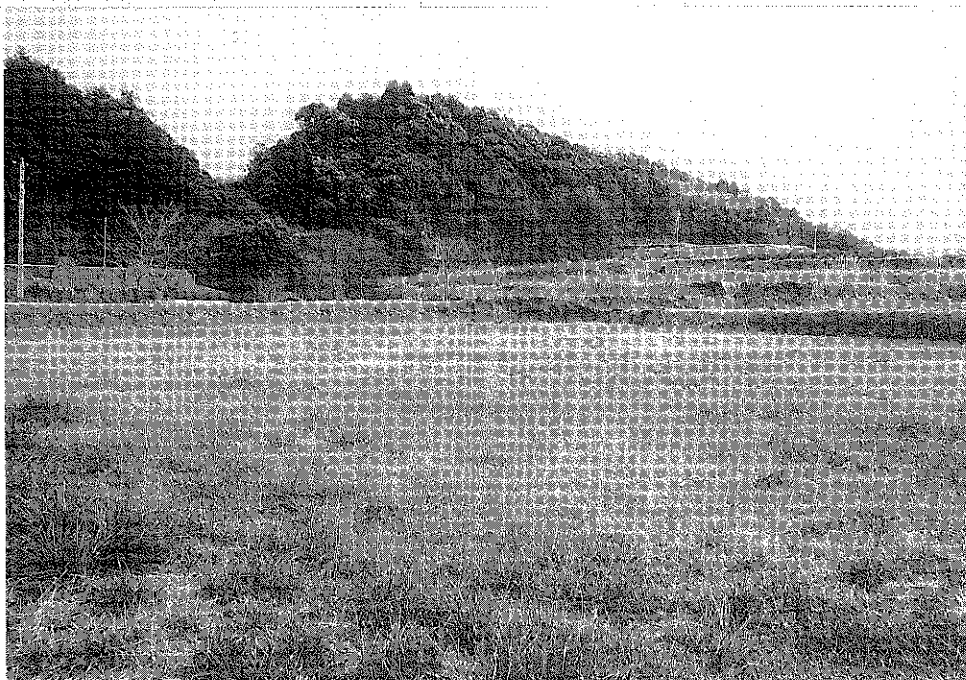


fig. 7 4 トレンチ北の状況  
(N→S)



fig. 8 5 トレンチの状況 (N→S)



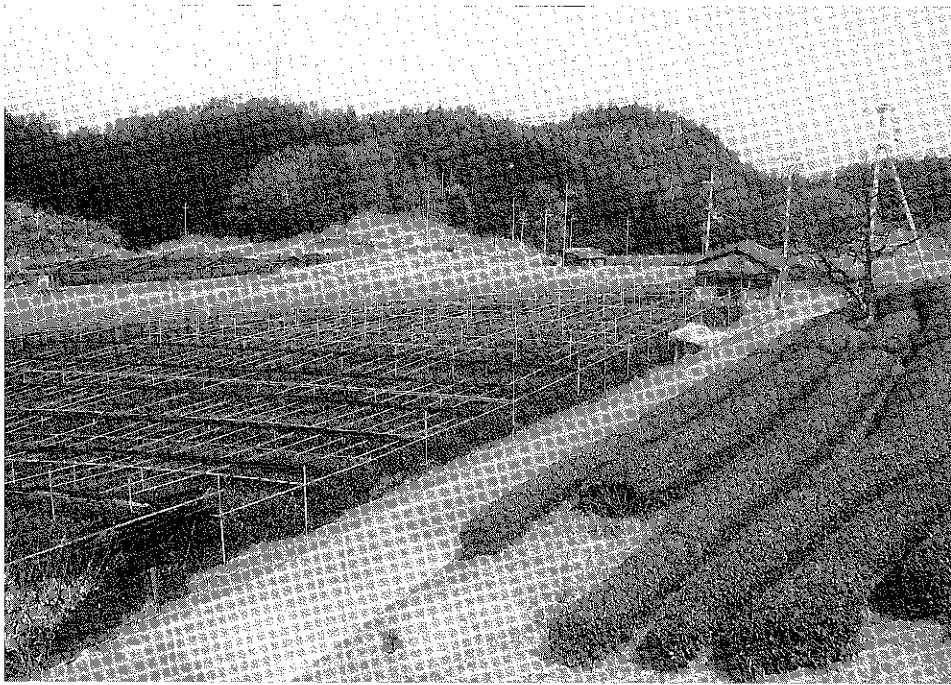


fig. 9 上明地区の風景（中央丘陵麓が調査区4、S→N）

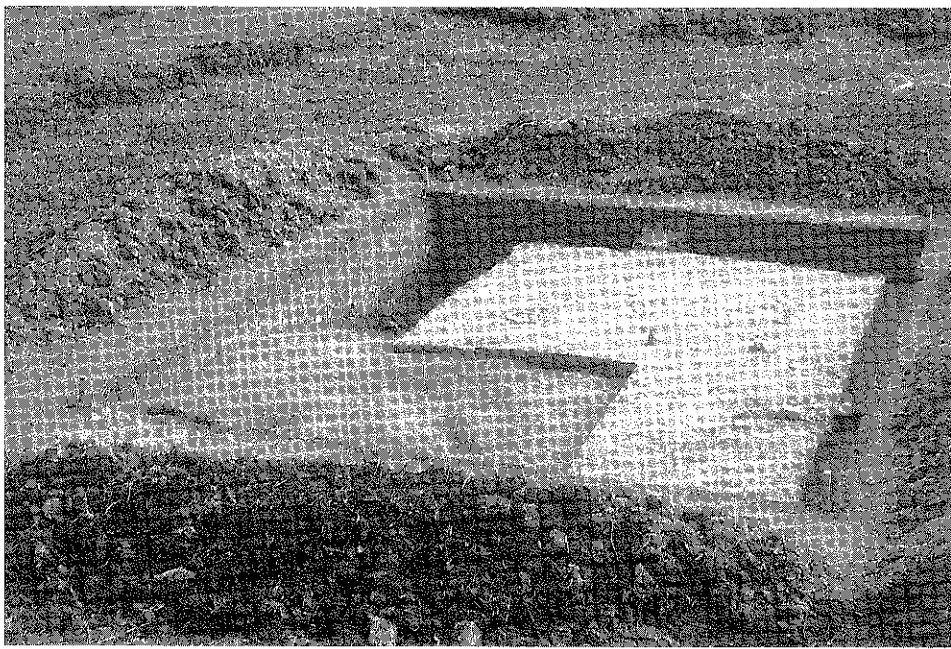


fig.10 9トレンチの状況  
（深掘り部が旧流路跡、  
NW→SE）



fig.11 10トレンチの状況  
（W→E）



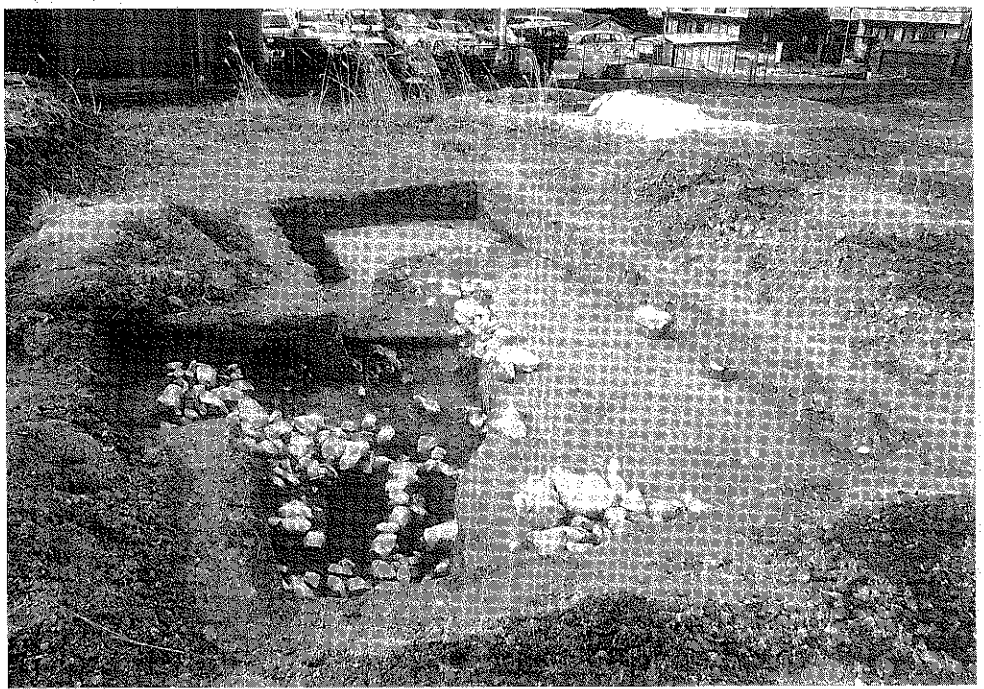


fig.12 11トレンチの状況（整地土中の石・遺物、E→W）

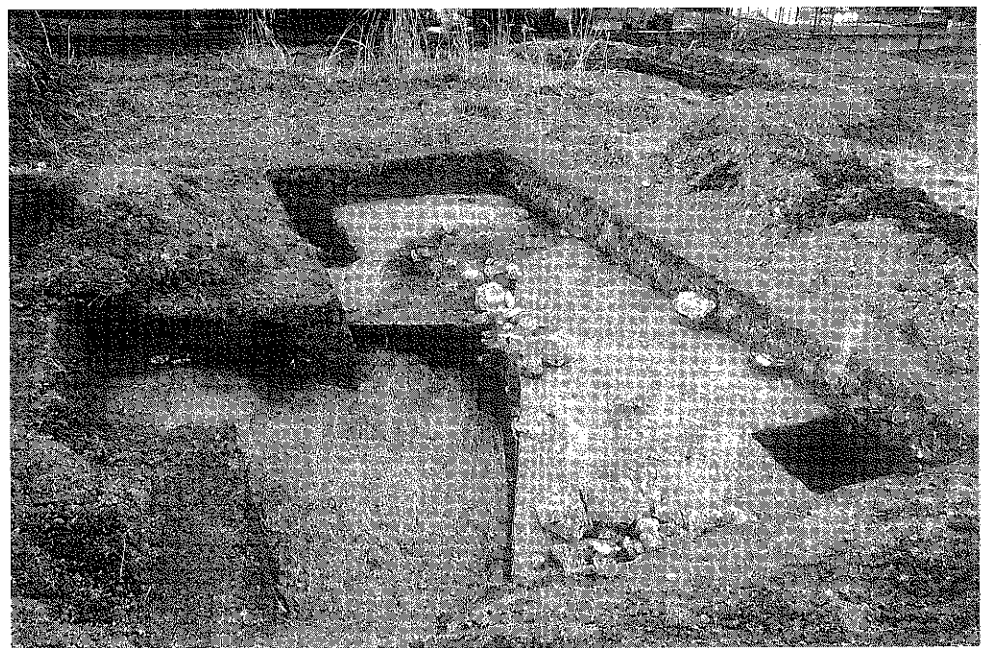


fig.13 11トレンチ（整地土を一部除去し旧地形を検出）

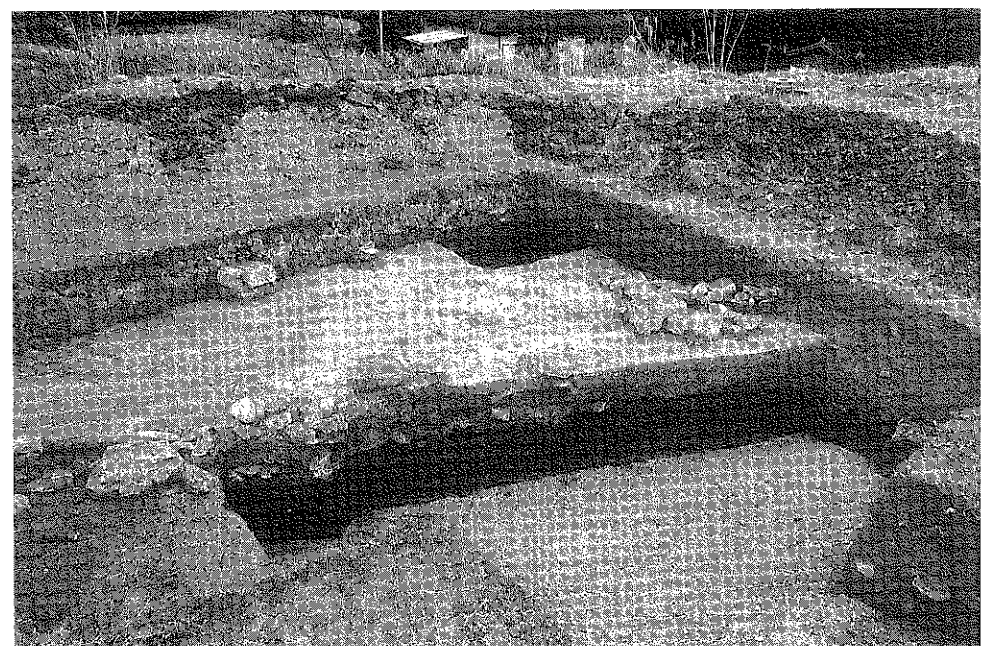


fig.14 11トレンチ（整地土層の状況、S→N）

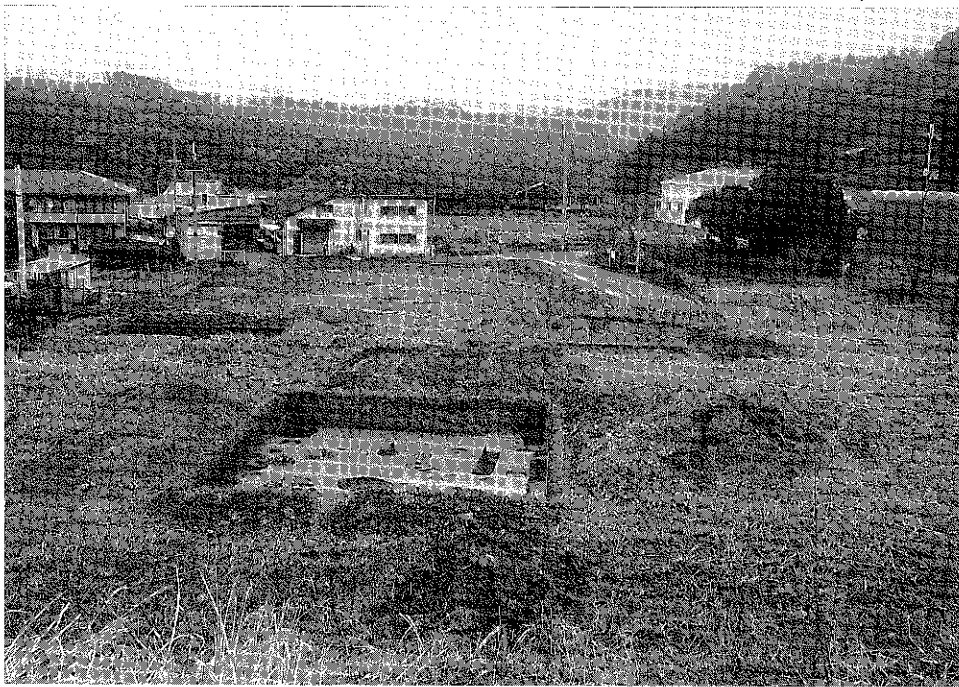


fig.15 12トレンチから北を望む

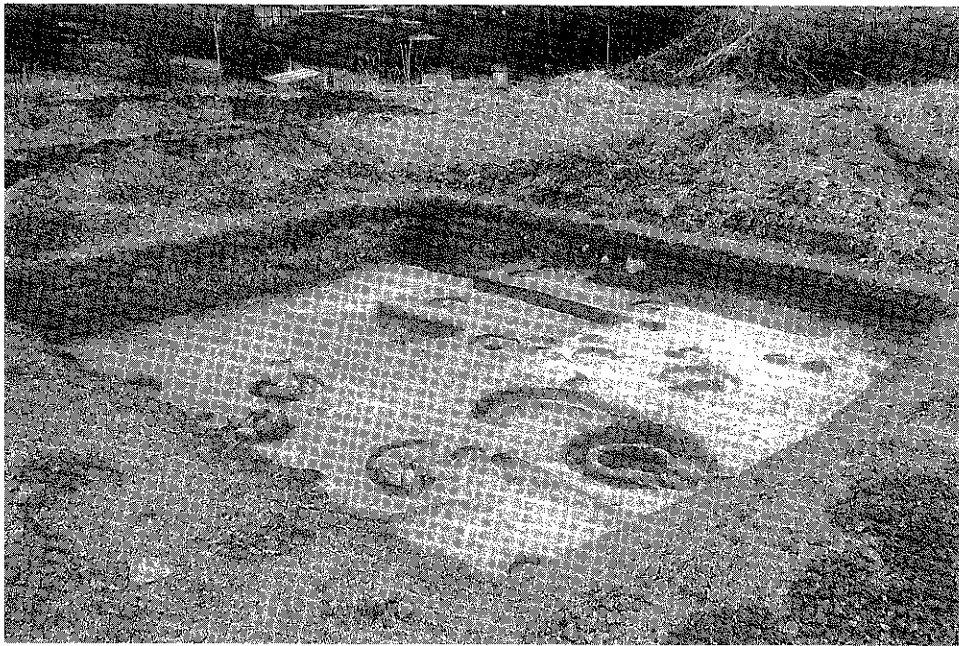


fig.16 12トレンチの状況  
(W→E)



fig.17 12トレンチ遺物出土状況



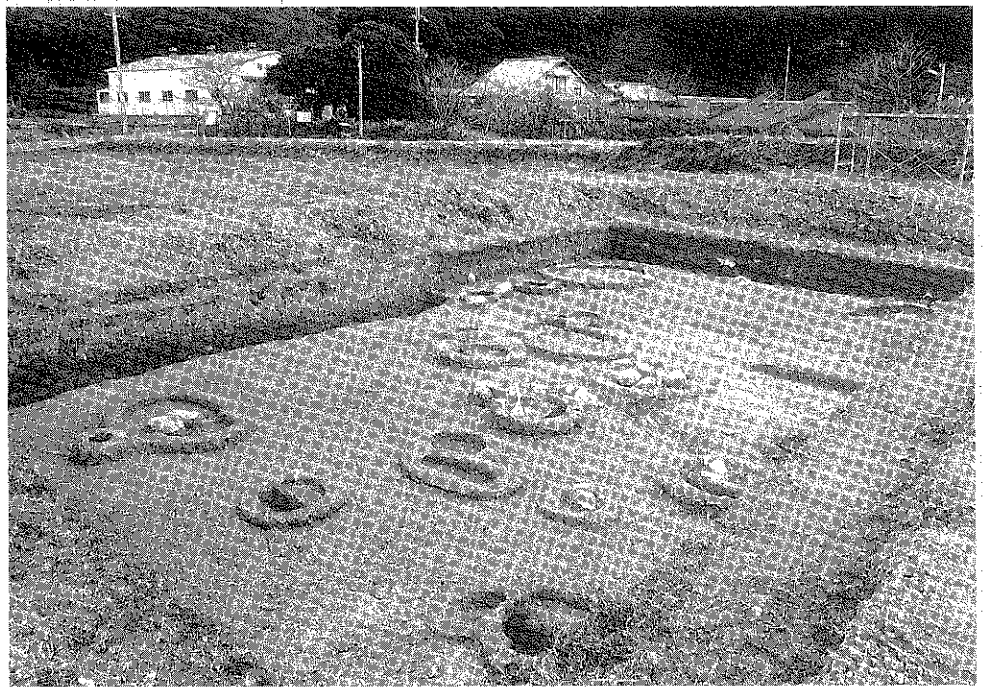


fig.18 13トレンチの状況  
(W→E)

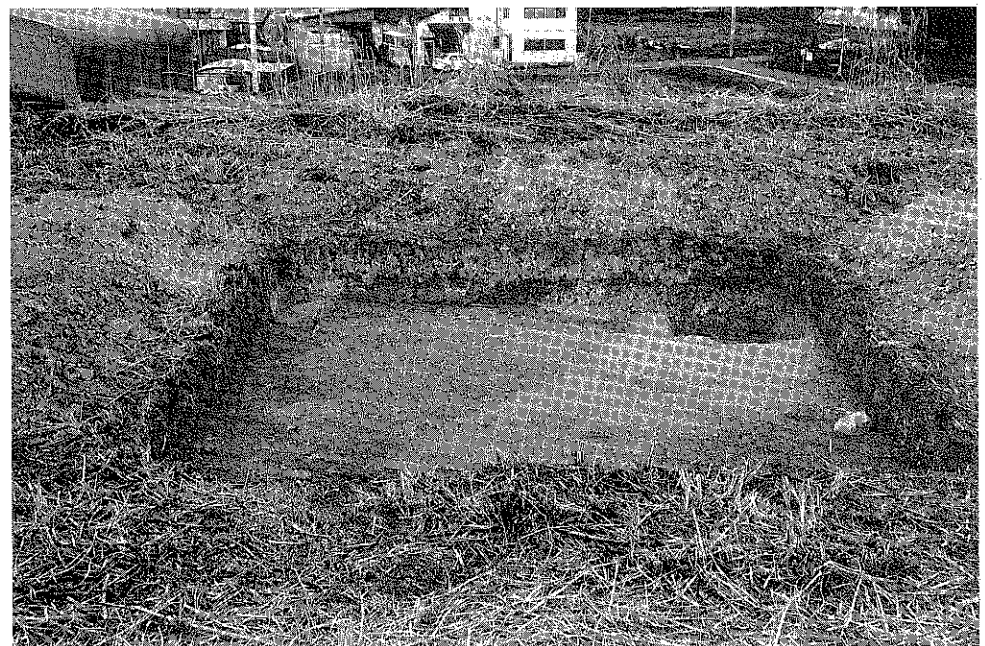


fig.19 14トレンチの状況  
(S→N)



fig.20 15トレンチの上層遺構  
(E→W)



5 トレンチは丘陵西斜面南裾に設定した。この部分には幅5m、長さ10m程のテラス面が認められ、その性格確認が目的である。このテラスの前の水田は「ジゾウドウ」と呼ばれている。腐植土を除去すると地山があらわれ、地山上に礎石を思わせる20cm程の平たい石が1個確認できた。他には特に遺構・遺物は検出されていない。

6 トレンチは丘陵東斜面南裾に存在する炭焼き窯に設定した。近代以降のものと思われ、清掃調査を行った。

(調査区3) 調査区3は、調査区1の谷状地形の北側であり、坊院跡などを予測させる平坦地が認められる最も南部分となる。面積規模の大きい平坦地は茶畑であるため、その上の水田に7・8トレンチを設定した。

7 トレンチは、耕作土と床土を除去すると黄褐色粘質土を基盤とする遺構面が確認され、素掘りの南北溝が1条認められた。ただし削平を受けているようで、溝は浅い。中世に所属する土師器・瓦器・陶器・輸入磁器の破片が出土した。

8 トレンチも7トレンチと同様な状況で、南北溝とピットが2個ほど認められた。中世に所属する土器の破片が出土した。

(調査区4) 調査区4は、白川谷から丘陵を南に越えた上明地区<sup>じょうみょう</sup>に設定した。上明地区は、白山神社前を流れ宇治川へと注ぐ寺川の上流にあたり、山間に南北400m、東西300m規模の小空間が開け、茶畑あるいは水田が展開している。現在は林道が東縁を通るが、少し前まで寺川をさかのぼる小道などしか通じていない閉鎖的空間であった。人家はない。

この全くの山間の小盆地にも、白川金色院に関係すると推測できる伝承が伝えられている。今までに採集し得た伝承地をfig.21に示した。まずA地点は土器あるいはカブト・ヨロイ出土伝承地である。土器(茶碗)出土は電柱設置の時という。カブトの出土は戦前のことであり、ヨロイは栗の木の下を掘った時に見つかったが、埋め戻したという。B地点の平地部の水田に「ハッコウデン」、山際斜面に「ドウノモト」の地名が伝えられている。C地点の丘陵上の平坦地は「テンノガラン」と呼ばれている。D地点の丘陵上の三つの平坦地は「カヤオウ」という名の僧が住んだ場所であり、瓦が散っている。またそこへ続く道もある、という。ちなみにE地点は白川地区の別山の南丘陵にあたるが、この場所は「シンシヤマ」と言い、現在、文殊堂伝承地脇に建つ重要美術品九重石塔周囲の五輪塔群は、ここから運ばれたものが含まれているという。これらの伝承の実像については、今後、考古学的手続きを踏みつつ順次解明してゆく必要があるだろう。

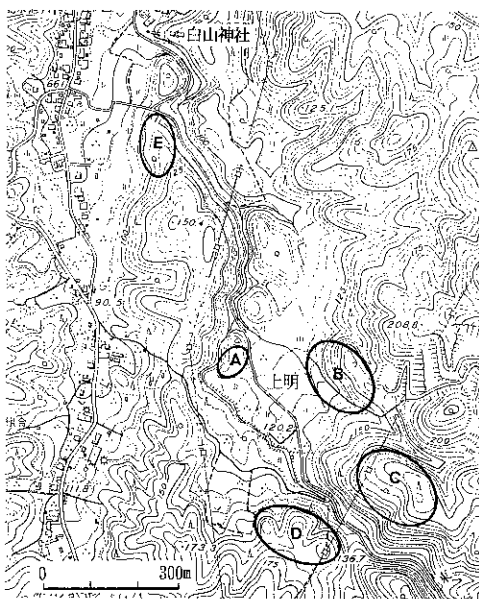


fig.21 上明地区の伝承地

今回のトレンチはこの伝承地の中のA地点南側の

水田に設定した。9トレンチと10トレンチである。周囲の茶畑を踏査すると中世期に所属すると思われる土器の細片が認められる。

9トレンチは、耕作土下に地山を認めた。無遺構・無遺物である。

10トレンチは、耕作土下に耕作地盤造成の黄色粘土層があり、それを断ち割るとトレンチ中央で急激に落ちる地形を認めた。埋土は下部が砂層で底には礫と小枝などの有機質が堆積しており、おそらく旧河川が耕地拡大によって埋め立てられたものと思われる。黄色粘土層からは奈良時代に所属すると考えられる土師器片や須恵器片、あるいは平安初期の須恵器水滴などが出土した。この遺物を含む客土はおそらく近世ないし近代における営為であり、状況的には付近から採掘されたものと推測できる。

伝承地のA地点の丘陵斜面に、数か所のテストピットを設定した。この斜面は以前は耕地だったようで、地山上に70cm程厚の耕作土が認められた。

(調査区5) 調査区5は寺の想定中心域の一面であり、参道の南に展開する棚田部に11～15トレンチを設定した。

11トレンチは、園池跡の窪地へと急激に地形が下降する部分の棚田に設定した。耕作土や床土を除去すると礎石とトレンチ中央を蛇行する溝状の土色変化が確認できた。この溝状の土色変化は、北へ傾斜する旧地形を埋め立てて平坦地化した造成土下層の始まりが表れたもので、溝状の土色変化北側肩を構成する地山類似層は、造成土上層であることが理解された。造成土下層は暗褐色を呈し、炭・焼土と共に礫・土器類・瓦類が多く含まれていた。土器類は概ね15世紀後半期に所属するものであり、瓦は平安後期の河内産を含む。瓦は焼けた痕跡があり、土器の一部にも焼けたものが含まれていた。

12トレンチは、11トレンチと基本的に同じ平坦地に設定したもので、耕作土や床土を除去すると柱穴や土壌が複数認められた。出土する土器類は概ね15世紀後半期に所属するものである。トレンチ南半分は淡灰色粘土の地山であるが、北半分は11トレンチと同様な整地層である。

13トレンチは、伝辻之坊跡の南側にあたる。このトレンチでも耕作土床土を除去すると柱穴や土壌が複数認められた。トレンチ東側には整地層が広がり、遺構はこの整地層を穿つ。整地層の部分的断ち割りでは、下層に特に顕著な遺構は確認されていない。遺物は床土中や遺構から、中世から近世にかけての土器類、あるいは平安後期の河内産軒丸瓦などが出土した。この瓦には焼けた痕跡がある。

14・15トレンチは、12トレンチの一段上の棚田に設定したものである。14トレンチは耕作土や床土を除去すると直ちに淡黄色粘質土の地山が表われ、遺構は確認できなかった。

15トレンチは、耕作土と床土を除去すると、重複する東西方向に延びる幅1m程の素掘り溝が検出された。検出面は整地層である。溝内からは中世期の瓦や土器類が出土した。新しい溝中には炭層が認められた。トレンチを部分的に断ち割ると、遺構検出面より1～1.5m程下層に地山が確認され、礎石らしい石も確認できた。すなわち、15トレンチ部分の旧地形は谷状の窪地であり、それが埋められ上層遺構が構築されたことが理解された。

## IV. 出土遺物

本年度の調査では、整理箱約15箱におよぶ遺物が出土した。種類は土師器・須恵器・瓦器・陶磁器そして瓦などである。第1～4調査区の出土遺物は、中世遺物あるいは古代の遺物を含みつつも多くは近世のものであったが、第5調査区では「金色院御堂再興勸進状」に記される長祿4年(1460)の金色院焼亡に比定可能な15世紀後半頃の遺物が相当量出土した。ここでは、この調査区の遺物を中心に報告する(fig.22)。

(12・13トレンチ出土土器類) 1は瀬戸焼の折皿。見込み中央は化粧がけのみおこない、釉をかき取る。高台は露胎で輪トチンの痕跡がのこる。2は玉縁状の口縁をもつ白磁碗。これらは12トレンチより出土した。3は断割の下層で出土した土師器皿。器高は1.6cmとやや浅い。一段ナデで、端部を弱く面取りする。13世紀後半。4は龍泉窯産の青磁小碗。口縁端部が極度に外反し、内面に画花文を施す。ともに15トレンチ出土。5は美濃焼の天目茶碗。体部下半の露胎部に化粧がけを施し、上半内外面に鉄釉を施釉する。口縁端部はS字状に強く屈曲する。大窯Ⅱ期か。13トレンチ出土。

(11トレンチ出土土器類) 遺物の多くは、11トレンチの炭・灰混じりの黒色土層から出土した(6～29)。6～25は土師器皿。淡赤褐色～淡橙褐色のものが大半をしめる。いずれも見込みを一方向にナデたのち、体部から口縁部にかけて右回りに横ナデする。ナデは概して弱い。6～12は平たい底部をもち、体部が外反するタイプ。口径7.0～8.0cmのものが多い。何らかの成形技法に伴うものか、見込みに強い凹線が入るのが特徴である。10は底部外面に煤が付着する。11にはこのサイズの皿にはまれな直上するナデ上げが施される。12は焼成後、底部の2箇所から径3.0mm大の穴を穿つ。このように穿孔したものがこのサイズの皿にめだつ。13～15はへそ皿。いずれも口径7.0cm前後を測り、淡黄白色を呈する。口縁端部はつまみあげられたようにわずかに上にふくらむ。16は内面のナデ調整、18は形態の面でほかの資料と大きな隔りがある。17は底部を親指で幅広く押しくぼめる。19は内湾してたちあがる皿。口縁に煤が付着する。20～25は体部が直線的にたちあがるタイプで、3法量存在する。20はナデ上げが逆「く」字状に折れ曲がる。24は内面に不定方向のハケ目痕をのこす。25は斜行するナデ上げが施される。器壁が3.0mm程度とうすく、胎土も精良である。以上の土師器はほぼ15世紀後半に比定できる。

26は鎬蓮弁文青磁碗。龍泉窯の製品。27は白磁碗。火災による熱をうけており、淡黄緑色の釉が風化し、細かい気泡が表面に生じる。28は瓦質土器の火鉢。体部がほぼ垂直にたちあがり、獸足をもつ。内外面を丁寧にナデたのち、外面にミガキを施す。

(出土瓦類) 29・30は中房に二巴文を配した複弁六弁蓮華文軒丸瓦。平等院出土資料に同文および同範瓦がある。河内向山瓦窯の産で12世紀前半。29は範傷の状況から平等院の同範瓦に先行する。30は11トレンチより出土。この他、11トレンチからは三巴文を主文とする軒丸瓦、15トレンチからは均整唐草文軒平瓦が出土している。

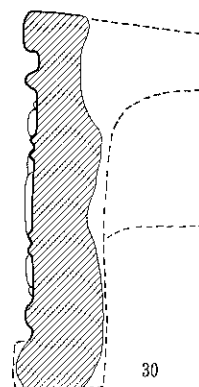
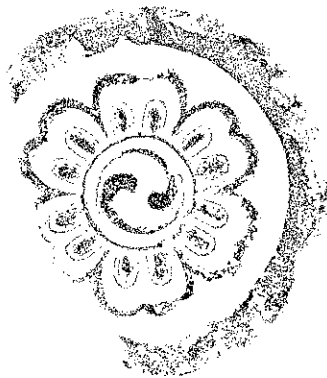
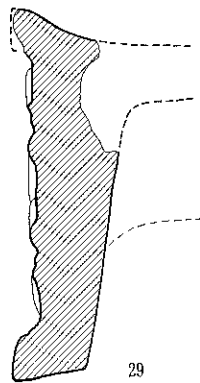
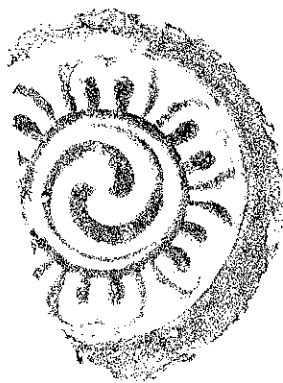
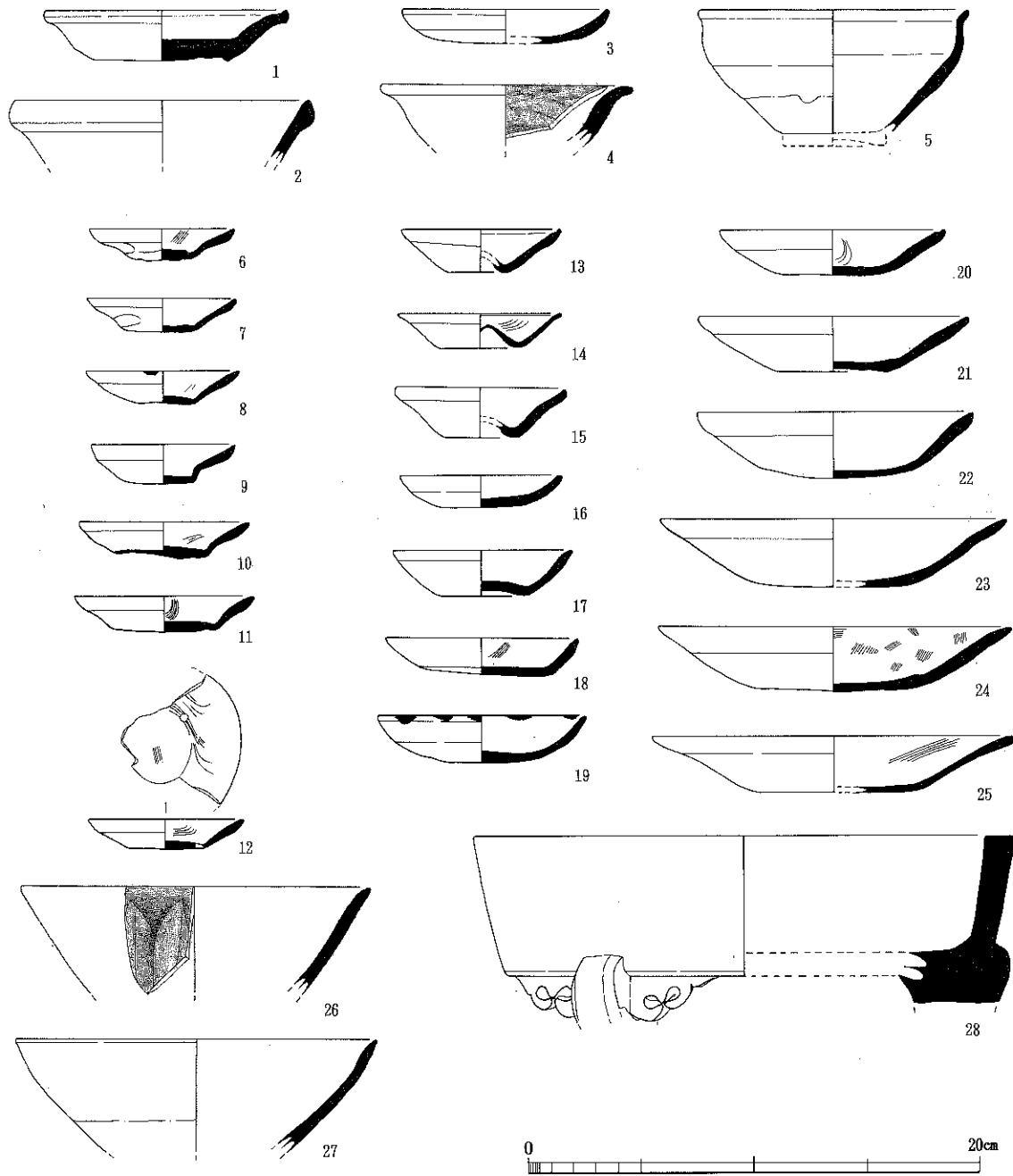


fig.22 出土遺物実測図

## V. ま と め

以上、本年度の発掘調査の状況を述べてきた。最後に今回の成果について整理したい。

まず、今回の成果の中で注目したいのは、第5調査区で上下に重複する15世紀後半期の整地層あるいは遺構を確認できたことである。特に11トレンチでは、整地層下層に灰・炭と共に15世紀後半の土器が大量に含まれ、焼け跡処理を思わせる状況にあった。またここからは火を受けた平安後期河内産軒丸瓦が出土した。近年の市域の発掘で、河内産は平等院を中心に摂関家が関与したと想定できる施設に集中的に供給されていることが理解され、瓦編年も一定は可能である。金色院でも今回に限らず平成5年度の発掘以降、河内産はしばしば出土している。これらを平等院の河内産の変化と比べると (fig.23)、12世紀前葉の鳳凰堂改修に用いられた河内産の新旧にはほぼ対応可能で、11世紀後半に比定できるものは金色院では見つかっていない。すなわち11トレンチの状況は、創建期の建物が15世紀後半に焼失し、直ちに再興されている姿と理解でき、それは「金色院御堂再興勅進状」に記された再興経過と一致することとなるのである。

ついで、南限におよその目安が付けられたことがある。中世期の寺院は、古代寺院のように寺域を築地や塀で囲うものばかりではない。また金色院の地形を見る限り、ここに規則的な寺域を限る施設を予測するのは難しいと感じる。今回の調査区1と3との差異は、周辺の地形状況も含めて、調査区1の谷状地形が遺跡の地形的南限である可能性を示していると考えられる。

白川谷だけでなく、関係遺跡が丘陵部や周辺にいかに関係展開するかについて、調査区2と4とで発掘を行ったが、今回は特に顕著な遺構・遺物は確認していない。しかし、地元での聞き取り調査では、かなりの範囲において金色院に関係すると思われる言い伝えが残されており、今後の確認が必要であろう。

今回の発掘成果を踏まえ、さらに白川金色院の実像究明に取り組んでゆきたいと考える。

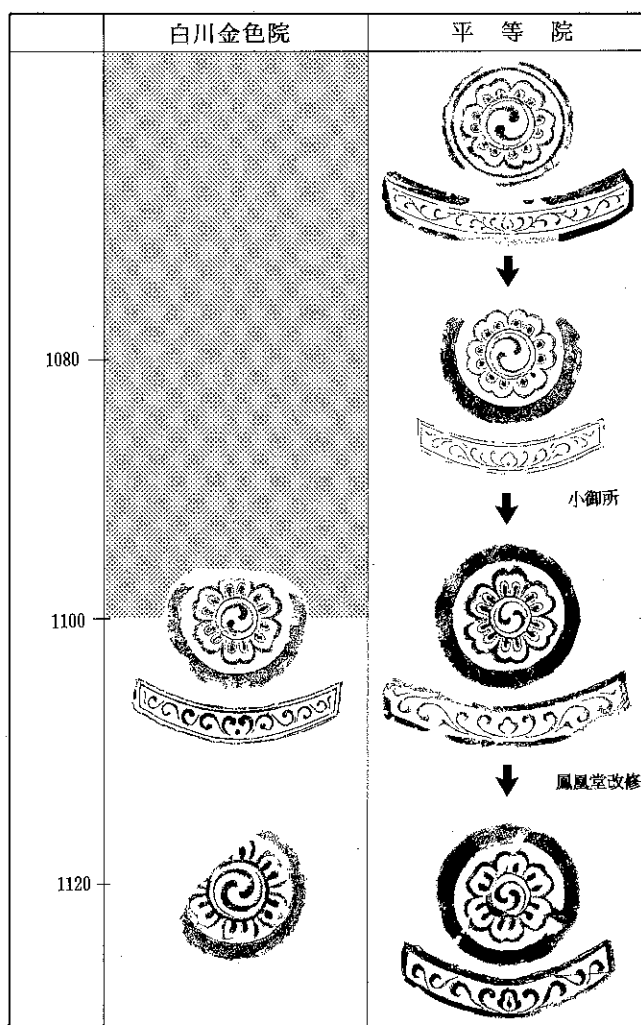


fig.23 河内産軒瓦の変遷



# 抄 録

ふりがな	しらかわこんじきいんあとはくつちょうさがいほう							
書名	白川金色院跡発掘調査概報							
副書名	平成11年度							
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第46集							
編著者名	浜中邦弘・杉本 宏・中井淳史							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
白川金色院跡	宇治市白川宮ノ前他	26204	10	34° 52' 28"	135° 48' 55"	991020 ～ 003017	450 m <sup>2</sup>	範囲確認
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
白川金色院跡	寺跡	平安～江戸	礎石建物・溝・土壇	土師器・瓦器・瓦・輸入磁器				

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第46集)  
**白川金色院跡発掘調査概報**

－平成11年度－

発行日 平成12年3月31日  
 発行者 宇治市教育委員会  
 編集 宇治市歴史資料館  
 〒611-0023 宇治市折居台1-1  
 印刷 新進堂印刷所

